五百川三十三観音の由来一考（上）

長岡　信悦

五百川三十三観音の由来については、朝日町観光協会が発行している「五百川三十三観音～畏敬への遥かなる旅路～」に次のような縁起が掲載されている。

「江戸時代、酒井藩のもとで朝日岳麓の白倉では銅などを掘る鉱山があったが、雨による水害の度に遠く左沢まで稲が枯れた。その原因を知らない当時の農民達は朝日権現の下を掘った為の山の怒りだとして鉱山の閉鎖をしようとした。

その首謀者であった水口の石橋太郎と中沢付近の待神（たいじょう）上人が、遠くは七軒、左沢まで閉山勧告の旨を書いた廻状をやり、五百川一帯の百姓が鉱山に酒米を供出していた白倉の竹内、立木の阿部両家におしかけ、米、酒の供出をしない旨を公約させ鉱山の経済封鎖をした。

この農民一揆を怒った酒井藩によって、首謀者の石橋太郎・待神上人は捕らえられ左沢に送られた。石橋の人徳に感心した上人はこれからの世をよりよいものにするよう頼み、上人は太郎を逃亡させた。その当時は十年で時効となるため、石橋太郎は十年間西国八十八ヶ所を中心に日本全土を放浪した。

十年間の長い月日を過ごして、当然自分の家などは無くなっているものと思っていた石橋太郎は、水口の対岸の雪谷から水口を見たら自分の家が残っているのがわかり、最上川を一目散に渡り、佐竹文右衛門の許に走って、彼が今までながらえたのはひとえに西国八十八ヶ所の観音様の為であるとし、待神上人の冥福を祈る事を目的として五百川三十三観音を作るために援助を頼み、それがきっかけとなって五百川三十三観音が成立したと言われ、一番は自分の生まれた水口で、三十三番は彼が自分の生家を見たという雪谷部落になっている。」

この縁起については、県立寒河江高等学校社会部が昭和四十五年一月に発行した「研究収録第七号　和合りんごの研究外」において「講の研究」の資料として掲載されているものであり、出典等は不明である。

ところが、昭和二十九年六月に出されている、旧西五百川村の「村報いもがわ」に佐竹生の名前で「五百川三十三ヶ所札所の由来」という記事が見つかった。それによると、左沢まで行く途中の藤田原にあった「待定上人入定の跡」という標木が気になり、調べたところ、待定上人が白倉騒動と言われる百姓一揆の後始末を身を以って引受け、藤田原で仕置（生埋め）を受けた傑僧であることを知ったとある。また待定上人のことを調べていくうちに、この百姓一揆と係わりを持つものとして五百川札所の由来を知ったとある。古文書はあまり見当たらず、主として口伝を参考にしたとある。冷害の上に鉱山から流れ出る水のために稲が枯れ始めたことを思いやんだ水口村の長兵衛と林蔵なる者が登場してきたところで（以下次号）とあり、残念なことに次号以下は見つからなかった。従って、この後に石橋太郎なる者が登場してくるのかも不明である。（以下次号に続く）

■長岡　信悦
昭和 25 年 (1950) 常盤生まれ。昭和 47 年山形大学教育学部卒。その後、山形県公立学校教員として西村山管内の小中学校に勤務し、平成 22 年宮宿小学校長で退職。現在は NPO 法人朝日町エコミュージアム協会理事長、朝日町町史編さん専門員・文化財保護委員を勤める。